

# 唐代伝奇「陸顒伝」に関する一考察

消麴虫来源再考

増 子 和 男

## 前 言

当初、前回までの論考のまとめとして本稿の執筆を予定していたが、一九九九年四月より翌年三月までの間、北京大学中文系へ訪問学者として滞在する事が出来たのを機に、同大図書館等において、本稿の(上)で調べあげかねていた事柄を解決する糸口が見出された。そこで、今回は、いわば「番外編」として、それを報告し、多くの批正を冀う次第である。

\* \* \*

主人公の落第書生・陸顒の腹中であつて、いくら麴を食べても少しも太らないと言う体質の原因を作つていたこの虫は、彼のもとを訪れた胡人たちによつて天下の貴宝であることが明かされる。胡人たちは、薬を用いてこの虫を吐き出させるが、その姿は一、二寸ばかりで、青い蛙のようであつた。彼らは、その虫を大切に函に収めると、莫大な謝礼を陸顒に渡すと立ち去つた。

こうして得た宝で豊かに暮らす陸顒のもとに、ある日胡人が再び訪れ、海中世界へと誘う。その誘いに乗つて彼は胡人た

ちと共に海辺まで出かける。胡人はまず、この虫を油膏を入れた鼎に入れて火にかける。やがて海中から海底世界の使者が宝珠を持つて現れるが胡人たちは一人目、二人目の使者たちの持つてきた宝を不足として追い返し、三人目のもたらした宝を見て「至宝が来た」としてようやくこれを受け取る。鼎から取り出した消麴虫は、元通りであり、胡人は再びこれを大切に函におさめた。海底世界から得た至宝を口に含んだ胡人について海中世界に入った陸顒は、竜宮、蛟室からおびたしい宝を手に入れ、地上に戻る。(傍点は増子。以下特に断りがない場合は同じ)。

問題として残されていたのは、この物語の中心である「消麴虫」なる奇虫のことであつた。

一

本稿(上)において筆者は、この消麴虫は、南朝・宋の東陽無疑とうようむぎ『齊諧記』から清の蒲松齡『聊齋志異』(「酒虫」)に至る作品中見出される奇虫の系譜に連なるものであるとし、特に『太平広記』(以

下は、『広記』とのみ表記する(巻二二〇に引く「句容佐史」(出  
戴字『広異記』、作者未詳『異疾志』)と、

①その虫が腹中にあるとき、ある食べ物や飲み物がいくらでも飲  
食できてしまう点。

②それを胡人が高値で買いたいと申し出る点。

③胡人がそれだけの大金を投じる理由は、その虫が何らかの不思議  
な力を持っているからであるとする点。

という点が共通していることを指摘した。

しかしながら、こうした作品中見出される奇虫は、「竜のような形」  
(『齊諧記』)、「麻靴の底のような形」(「句容佐史」)、或いはまた「赤  
い肉のような形」(「酒虫」と言うように、何れの場合も、今日言  
うところの寄生虫を思わせる形状であった。

こうした話の中に、唯一「消麴虫」と似た形状を示すものとして  
は、『太平御覽』(以下、『御覽』と表記)巻八六二に引く『齊諧記』  
の一文と、それを下敷きにした形跡が極めて濃厚な、『広記』巻四  
七三に引く、唐・竇維とういびく『古古今五行記』に見える話がある。

これらの話では、虫と富との関わり及び胡人との関わりは見出さ  
れないが、前記した数話の特徴のうち①、すなわち、その虫が腹中  
にある時、ある食べ物や飲み物(この二話では鱸)がいくらでも飲  
食できてしまうという点では、前記した類話の一バリエーションで  
あると考える良いであろう。

問題の形状であるが、これら両話では消麴虫の形状、すなわち「青

唐代伝奇「陸驥伝」に関する一考察——消麴虫来源再考——

蛙」との類似性を連想させる。「蟾蜍」せんじよすなわちヒキガエルであつ  
たとする。

\* \* \*  
蟾蜍ですぐに思い起こされるのは、兎と共に月中に住むと考えら  
れ、月そのものの異名ともなった蟾蜍であろう。

〇三五明月満 三五 明月満ち

四五蟾兔欠 四五 蟾兔欠く

(古詩十九首・第十七「孟冬寒氣至」)、『文選』卷二五所収)

しかしながら、月中の蟾蜍と、人の腹中であつて大食の原因となつ  
た蟾蜍、さらには青蛙のような虫との間にどのような関連があるの  
か否か。また、『陸驥伝』において作者が先行する類話で語られた  
蟾蜍ではなく、敢えて青蛙としたのは何らかの意図が有つてのこと  
であるのか否か。これらについて本稿(上)においても、

①『聊齋志異』巻十一に載せる「青蛙神」との関係。

②『御覽』巻九五〇に引く、漢・劉安『淮南万畢術』に見える「青蚨」せいふ  
という銭を呼び寄せる術に際して用いると言う虫との関係。

などをも、この問題を解く鍵ではないかと挙げてはみたものの、そ  
の裏付けとなる資料を十分に見出せぬまま、やむなく「待考」とせ  
ざるを得なかつたのであつた。

\* \*

本話の、後半の舞台となった南海が、南シナ海沿岸―就中、唐代の行政区分で言うところの嶺南道周辺の沿岸部―を指す可能性が高いことは、前稿(中)において指摘した。

そこで今回、この地域に関連した事項について、民俗学・考古学関連の資料や先行の研究報告、そして当地の状況について記録した筆記の類を再度検討し直したのであった。

二

まず着目したのは、現在も広西省の東蘭、鳳山一帯で行われている「蛙婆節」(青蛙節、敬蛙節、葬蛙節、蟻蚱節)と呼ばれる行事であった。この行事は、中国の少数民族である壮族を中心に行われている。彼らは、中国少数民族中、最も人口が多く、居住する地域も広西盆地から沿岸部までに至る広範囲に及ぶ。

その行事のあらましは、

農曆正月乃至は十五日早朝に、青年男女が争つて田畑に走り、冬眠中の蛙を掘り起こす。初めに捉えた一匹を「蛙頭」と称し、次に掘り起こしたもう一匹とを対として、その一對の蛙を桃の枝で撃ち殺して「蛙神」として竹筒に入れ、これを祀る。そして日を選んで、葬礼を挙行し、今や神となった蛙の入った竹筒を銅鼓で覆うと言う。これは、銅鼓を蛙神が昇天し、人々に福をもたらす法器と見なした為であるという。

右のうち、青蛙(この場合は、死んではいないが)を竹筒に収める

点など、「陸顯伝」を彷彿させるが、ここで第一に考えるべきは銅鼓である。

ここに言う銅鼓は、我々日本人にとつても、『三国志演義』等でないみ深い、古代より西南・嶺南の広範囲の少数民族間に見られる青銅製の打楽器であり、祭器としても用いられたと考えられているものである。

今日見ることの出来る奏法では、演奏に際しては、胴に当たる部分に縄を掛けて吊り下げるのであるが、銅鼓の形状は、一般的な太鼓とは異なり、その片面は空いていて、もう一面を打つて音を出す仕組みになっている。そして、空いた片面から伏せた木製の桶状の物を入れ、もう片面を先端を布でくるんだ木製の棒で打ち鳴らし、その桶を前後させることによって、音の高低をつけるのである。

その歴史については、後漢の馬援が、交趾(今日のベトナム)に遠征した際に持ち帰ったとも(後漢書』卷二四「馬援伝」、三国・蜀の諸葛亮が孟獲を伐つに際して異民族中で作ったとも称せられてはいいるが、それらは何れも伝説の域を出ず、実際はそうした伝説より遙か昔から作られていたと考えられている。

それはさて、この西南・嶺南地区の銅鼓なるものが、中国の人々の間に広範かつ詳細に知られるようになった時期は、右に示した『後漢書』の書かれた南朝・宋より下った時期と見るべきであり、それは、

○広州夷人宝貴銅鼓、而州境素不出銅(唐・房玄齡『晋書』卷二

六「食貨」

○時(歐陽) 鍾合門權貴、威振南土、又多致銅、鼓生口、獻奉珍異、前後委積、頗有助軍圍(唐・李延壽『南史』卷六六)

○自嶺已南二十余郡、大率土地下濕、皆多瘴厲、人尤天折。南海、交趾、各一都会也(中略)並鑄為大鼓、初成、懸於庭中、置酒以招同類。來者有豪富子女、則以金銀為大鈸、執以扣鼓、竟乃遺遺主人、名銅鼓鈸(唐・魏徵『隋書』卷三一「地理下」)

と云う正史の記述や、

○象筵照室會詞客 象筵やうてい 室を照らして 詞客を会せしめ、

銅鼓臨軒舞海夷 銅鼓 軒に臨みて 海夷を舞はしむ

(劉禹錫「馬大夫の浙西王侍御が贈答詩を示すを見て、命に因りて同作す」『全唐詩』卷三六一)

○玉螺一吹椎髻聳 玉螺 一吹すれば 椎髻聳え

銅鼓一擊文身踊 銅鼓 一撃すれば 文身踊る

(白居易 新樂府「驃國樂」『全』卷四二七)

○黑幡三点銅鼓鳴 黑幡三点 銅鼓鳴り

高作獼啼搖箭箛 高く獼啼を作して 箭箛を揺らす

(李賀「黃家洞」『全』卷三九二)

と云う詩句、さらには、

○蛮夷之樂、有銅鼓焉。形如腰鼓、而一頭有面。鼓面三尺余、面

唐代伝奇「陸贄伝」に関する一考察 —— 消麴虫来源再考 ——

与身連、全与身連、全用銅鑄：(唐・劉恂『嶺表錄異』〔叢書集成初編本、拙『武英殿聚珍版叢書』)

などのように、前代に比して銅鼓に関する記述が目立って増加する唐代の事であると考えるのが穏当なようである。

右のうち、とりわけ注目し値するのは、西南・嶺南地区の銅鼓について最も詳細に記録している劉恂『嶺表錄異』の次の記述であろう。劉恂は、右に引いた記述の少し後に次のような逸話を紹介する。

○僖宗朝(八七三―八八八年)の頃、鄭綱ていこう(七五二―八二九)が、番禺はんやう(今日のマカオ付近)を鎮圧したとき、次のような話をした。林藹りんえいと云う人が高州(今日の広東省)の太守だったとき、

一人の牧童があつた。

ある時、牧牛の間から、蛤かき(かじか蛙)<sup>13</sup>の鳴き声が聞こえたので、かの牧童が追いかけて捕まえようとする、この蛤は、一つの穴に飛び込んだ。そこで、この穴を掘り抜けてみると、それは少数民族の酋長の墓であつた。蛤の姿は見あたらず、そこに銅鼓が見つかった。その色は、緑色で、あちらこちら腐食していたが、その上がかすかに盛り上がっていて、多くの蛙の模様が鑄られていた。あるいは、かの鳴いていた蛤は、この銅鼓に鑄られていた蛙の精であろうか。そこで、役所に届け出たので、役所では武器庫に掛けることとし、それは今日なお存する、と。

右の話は、第一に、銅鼓が土中より発見されたと言ふ事実を記録

した物と見ることが出来る。実際、『嶺表録異』以降の嶺南の様々を記録した筆記の類には、「土中から発見された銅鼓」の事を示した物が少なくない。

『嶺表録異』は、右のような事実を記録するほかに、本稿を考える上で重要な事象を記録している。つまり、牧童が蛤(蛙)の精？を追いかけて銅鼓を発見した云々とは、あくまでも伝承であったとしても、銅鼓に蛙の像が铸られていた事は(たとえ人からの伝聞であるとは言っても)事実だと言うことである。

### 三

何故に「蛙婆節」では、一对の蛙を祭り、銅鼓の模様や装飾に蛙を用いるのか。

既に前者においては宗教的・呪術的要素が濃厚である。一方、今日の我々とは異なり、装飾を単なる装飾と考えぬ事の多かつたであろう古代に製作された銅鼓に蛙の装飾が見出されることからすれば、当時の人々が蛙を一種特別な物と見なしていたと考えてしかるべきであろう。

そうした蛙に対する一種の崇拜乃至は、信仰を示した話として、しばしば引用されるのは、次のような逸話であろう。

○越王(勾踐)が、呉を伐とうとした時、(自らの)将兵たちに死を軽んじて(勇敢に戦うことを)求めた。出発しようとする時、怒った龜(かえる)を見て、これに対して式(しき)した(車の)手すりにつかまって挨拶した。従者が何故そんなことをするか尋ねたところ、「この蛙には気があるからだ」と答えた(中略)

また一説には、越王勾踐が、怒った蛙を見て、これに対して式した。御者が何故こんな事をするかと問うと、「蛙にさえこんな気があるのだ。どうして、これに式せずにおられようか。」と答えた。(『韓非子』内儲説)。

今日、右の話は、古代越国の人々の蛙に対する崇拜を示したものと考えられている。その理由を「図騰崇拜」つまり、トーテミズム Totemism にあるとする説が大勢を占める。

そうした先行の研究の中でも、先に示した「蛙婆節」なる行事を行っている壮族のトーテミズムを絞って調査・考察している丘振声、『壮族図騰考』が、蛙図騰に関して特に一章を割き、先行の説の要点を詳細にまとめて非常に参考になる。

同書によれば、本稿注13でも既に指摘したように、特に古代においては、「青蛙」と「蟾蜍」は、しばしば混同されたとし、『国語』以下、唐・尉遲枢『南楚新聞』、宋・張師正『倦遊雜錄』などを例に挙げて、後世においても、両者の混同が続いたとする。そして、図騰として崇拜されたそもそものは、青蛙ではなく、むしろ蟾蜍であるとし、本稿においても可能性として少しく示した中国古来の「蟾蜍」つまりヒキガエルに関する言及と関連づけて、北方の仰韶文化の陶器上に見える「蛙紋」にまで遡りうるものであるとし、百越と呼ばれた南方の諸族で信仰されたものもまた本来蟾蜍であったに相違ないと考証し、その証左として、今日の、

- ① 広東地区
- ② 桂東地区
- ③ 桂西南地区
- ④ 桂西地区

⑤ 巖室郡 ⑥ 上林県

等の各地域に蟾蜍に関する説話が残る事を指摘する。

このように初期において、何故に凶騰として崇拜されたのが蟾蜍であったのかについては、蟾蜍の持つ毒腺が強い自衛力と攻撃力を象徴し、併せてこの毒が用い方によっては、薬としての効能を持ち、そうしたところに神秘性を感じたのであろうと説明する。<sup>17)</sup>

こうした丘振声のまとめた先行の説に従えば、「陸頭伝」も、前稿(上)で挙げた、その類話とおぼしき蟾蜍にまつわる志怪・伝奇も、やはり根は一つと考えることに妥当性が出てくることとなるのであるが、仮にその説通りだとすると、何故に同じ蛙とは言え、大きさも姿形も異なる青蛙が、凶騰信仰にいわば「紛れ込む」ようになったのだろうか。

\* \* \*

『壮族凶騰考』では、こうした蟾蜍に始まるとされる広義の「蛙信仰」の理由として考えられた諸説を次のようにまとめる。

① 生殖崇拜と関連するとする説

蛙の声が嬰兒の泣き声と似ていることによる。

② 雨水を祈り求めるとする説

フレイザーの『金枝篇』(『Golden Bough』)に示された説。青蛙と蟾蜍、つまり広義の蛙は、共に水と密接な関連を持っていると考えられたことによる。

③ 農耕と関連するとする説

②の説と関連する。蛙は雨が降る前にしばしば鳴くということ

とから、蛙を雨水の使者、雷神の子女、使者とする。壮族の蛙凶騰信仰を考究する研究者の等しく指摘する説。このように農耕が始まる頃、本来は蟾蜍から始まった蛙凶騰信仰に、青蛙が入り込むこととなった。

④ 勇敢さを象徴するとする説

前出の越王勾踐が、蟾蜍に式したという説話に由来する説。越人は、怒蛙に死をおそれない精神を見て取ったとする。<sup>18)</sup>

このうち、青蛙が凶騰として信仰された理由として、農耕との関連が説かれているのは注意を要するであろう。

\* \* \*

応長裕「麻雀・青蛙・蚯蚓・牛・竜・田公・田婆」(本稿注15に既出)では、浙江省東部の奉化地区の稲作信仰に見える青蛙信仰を報告後、その理由を更に別の角度から次のように説明する。

① 青蛙は、稲やその他の農作物の害虫を専ら補食すること。

② 青蛙に解熱解毒の薬効があるとされること。<sup>19)</sup>

②については、蟾蜍の毒が薬になることと重ね合わせて考えられるが、①の指摘は、先の『壮族凶騰考』の指摘に加え考える重要な指摘と言える。

また、四川省・徳陽市に今日も伝承されている次の民話は「田鶏」の異名を持つ青蛙が田の神として祀られるに至った理由を次のように物語り、応長裕の提出した説をいわば補強する。

田吉少年と言う感心な子供がいた。ある年、彼の住む村に妖怪がやってきて、悪行を尽くして、家畜や子供を食おうとした。田吉は人々のために、この妖怪を退治しようと南海へ出かけて観世音菩薩に援助を乞うた。途中、悪魔は様々な妨害を試みたが、彼はことごとく術を見破り、一目散に南海へと向かった。観世音菩薩は、彼に白蓮と緑衣、玉の簪とを与え、くれぐれも気をつけるようにと言いつ聞かせた。田吉は勇氣百倍、妖怪と戦ったが、戦ううちに田鶏に変身し、永遠に農家の田畑を守護することになったのである。

この話は、田吉 (Tan Ji) と言う少年が田鶏 (Tan Ji) になったと言う、物の名の由来を同音の物で示すという典型的な民話のパターンを踏まえているが、先に示した浙江省の青蛙信仰の理由と併せて考えると、次のようなことが明らかになる。

- ① 先の浙江省の青蛙信仰とともに、四川省において現在でも青蛙信仰が行われており、青蛙信仰が広域に行われていることを示すこと。
- ② それが、田畑の害を除くところから、田畑の守り神として信仰されていること。

こうしたことから、『壮族図騰考』の提出した、青蛙信仰が農耕にとって必須の降雨を蛙が祈っていると考えた為であるとする説に

加えて、害虫を蛙が除いてくれると考えたという要素も、青蛙信仰の理由として考えておく必要があると言うこととなる。

ともあれ、青蛙信仰を農業と深く関連づけて考えるべき事は、以上のようにほぼ確かと言って良い。

\* \* \*

右の視点に沿って、ここで再び「陸贖伝」の一節を思い起こしてみたい。青い蛙のような奇虫・消麵虫が何故に天下の奇宝なのかを胡人は次のように説いていた。

此虫稟天地中和之氣、而結。故好食麵。蓋以麦自秋始種、至夏季、方始成実、受天地四時全氣。故嗜其味焉——この虫は、天地中和の氣をうけて生じました。ですから、麵を食べるのを好むのです。と言いますのは、麦というものは、秋に植え、翌年の夏に実ります。つまり、(この間に) 天地の四季の全ての氣を受けているので、麵の味を嗜むのです。

右の何とも理屈っぽい説明は、そこで使われている用語からして、唐代伝奇の担い手が、その身分に差はあったとしても、所謂士大夫と呼ばれる知識人であったことを示すものと思われる。

が、それよりもまず注目すべきなのは、本作品の作者が、この奇虫を農業と深く関連づけている点であろう。つまり、農業——この場合は麦作——と深い関連がある奇虫は、やはり寄生虫然とした姿形であってはならず、往古より脈々と続く田の守り神である蛙——とりわけ青蛙でなければならぬとする考えがあったと見るべきではない

か。

さらにまた、前稿(上)・(中)でも考証したように、本話は、

①胡人たちが自らの故郷を南越であると称していること。

②物語後半の舞台が南海とされること。

などから、唐代、嶺南道に属する「南海」が深い関連を持つものと考えられた。それは先に見た、蛙図騰を往古から今日まで信仰する壮族の居住区域とほぼ重なる。

仮に万一この物語の舞台が、唐代の嶺南道と多少ずれて設定されていたとしても、長江の、上流は四川省から下流は浙江省に至るまでの広い地域において今日でも蛙特に青蛙信仰が続いていることからすれば、本話が物語る「南」の範囲を大きく拡大したとしても、農業神たる青蛙信仰の行われている地域からはずれれることはまずないであろう。

従って、この消麴虫の姿を「青い蛙のような虫」としたのは、とりわけ南中国で長期にわたって、広い範囲で信仰されていた農業神・青蛙を踏まえものであると見ることは、かなりの確度を持つものと考えて良いであろう。

### 結語

以上、前回調べあぐねた「消麴虫」の来源につき、新しい中国の資料を参照しつつ考察した。

前稿(上)・(下)で検討したことと合わせ考えた場合、本話の青

蛙に似た消麴虫の来源は、やはり唐代の嶺南道の境域に居住した壮族の間で今日も行われている蛙特に青蛙信仰と深く関わりを持つであろう。

良く知られているように、当時の嶺南道には、少なからぬ知識人たちがやってきた。ある者は官僚の成功者として、そしてある者は左遷、流謫の身の上で…。

しかし、何れの場合も、彼らは、自分たちの住む乾燥した黄土に覆われた西北地域とあまりに異なるこの地域の風物に、多分の違和感を覚えつつも好奇の目を引かれたことであろう。

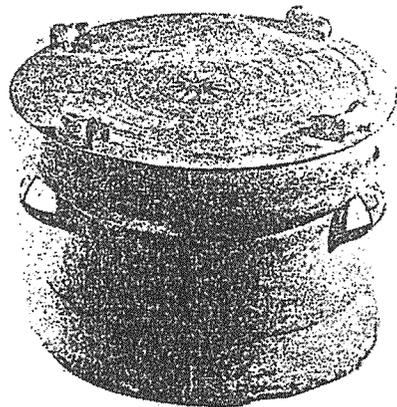
そこで目にした蛙・青蛙を裝飾した銅鼓や、それにまつわる奇談や伝説、おそらく「蛙婆節」の前身と思われる奇祭の話は、好奇心旺盛な唐代人士の耳目を集めたに相違ない。

本作品が収載されている『宣室志』の作者が従来の説通り張説(八三四一八八六?)であるとして、宣宗の大中十年(八五六)から僖宗の乾符五年(八七八)の間の二十数年間のその官歴は不明であるという。

或いは、この間に自身が直接嶺南道に赴いた経験があるのかとも思われるが、仮にそうでなかったとしても、当時の状況からすれば、こうした話題は、実際に出かけた人を含めて様々な人々から数多く集まったであろう。とすれば、「伝奇」つまり奇を伝えることに先ずは熱心であった当時の作者にとつては、その素材に事欠くことは無かったであろう。

【注】

- (1) 李劍国『唐五代志怪伝奇叙録 下』(南開大学出版社、一九九三年)では、『広記』がこのように二種のテキストを併記しているのは、前者の内容に後者が手を加えたためと説明する。
- (2) また、この事は、拙稿「鮫人泣珠考」(『村山吉廣教授古稀記念 中国古典学論文集』、汲古書院、二〇〇〇年四月刊行予定)でも、詳しく述べているので、併せて参看願いたい。
- (3) 蝸蚶とは広西方言で、青蛙を言う(『中国風俗辞典』、上海辞書出版社、一九九〇年)。
- (4) 国家民族問題五種叢書編委会《中国少数民族》編写組『中国少数民族』「壮族」の項参照(人民出版社出版、新華書店發行、一九八一年)。
- (5) 高文徳主編『中国少数民族辞典』(吉林教育出版社、一九九五年)。
- (6) なお、銅鼓は、西南・嶺南のみならず、①中原(殷・春秋)、②北方(匈奴・鉄勒部)〔『晋書』卷三三〇「赫連勃勃伝」〕や、渤海国(韓国国立温陽民族博物館所蔵)などでも、造られていたことが知られている(古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』、文物出版社、一九八八年)。
- (7) 本稿執筆の時期は、建国記念行事の一環として、少数民族を一堂に会した催事がいくつもあり、その様子を放映したテレビ番組が少なくなかった。本稿において筆者が銅鼓の演奏法を参考にした北京電視台のテレビ番組「中国民族体育・壮族編」(一九九九年九月放送)も、そうした番組の一つであった。



銅鼓 図  
 (広西博物館所蔵〔中国銅鼓研究会『中国銅鼓』本稿注6に既出])

- (8) これについては、鄭師許『銅鼓考略』(中国書店、一九九二年)に、
- ①『三國志』卷三五の諸葛亮の伝には、そのことが一切触れられていない。
- ②馬援は、得た銅鼓を鑄演して銅馬を作ったのであって、実際に中国本土に銅鼓を持ち帰ったわけではない。
- (9) 象筵(『全唐詩』では「筵」に作る)は、象牙で作られた席。多くは、豪華な装飾を施された席を言う。
- (10) 『全唐詩』は、以下『全』と表記する。

(11) 椎髻は、椎のように巻き上げた髪。文身は、入れ墨乃至は身体に模様をつける意。ともに、少数民族独特のものである。

(12) 『全』ではこの他、「銅鼓」の語を載せる作品は、①許渾「遊維山新興寺宿石屏村謝叟家」(卷五二八)、②同「送客南帰有懷」(卷五三〇)、③温庭「河濱神」(卷八九二)、④皮日休「寄滑州李副使員外」(卷六一四)、⑤李嘉祐「夜聞江南人家賽神因題即事」(卷二〇六)、⑥陳羽「健為城下夜泊聞夷歌」(卷三四八)、土孫光憲「菩薩蠻」(卷八九七)、⑦劉兼「昼寢」(卷七六六)の七首である。

(13) 原注に、「蛤とは、即ち蝦蟇なり。」とある。これを見ても明らかかなように、古くは、小型である青蛙の類と蝦蟇との区別が今日におけるほど厳密であることが知られよう。これについては、後に詳しく考えたい。

(14) その例を各時代一例ずつ挙げるならば、「内は発見場所」、宋・范成大「桂海虞衡志」(「土中」)「叢書集成初編、捫『知不足齋叢書』」、明・朱輔「溪蛮叢笑」中卷(「江中」)「叢書集成初編、捫『古今說海』」、清・陸次雲「峒溪織志」(「土中」)「叢書集成初編、捫『問影樓輿地叢書』」。

もつともこれら後世の筆記の中には、『嶺表録異』や『桂海虞衡志』など、先行の著名な筆記の記述をそっくりそのまま祖述するものがほとんどであり、彼らのうちどれだけの人が銅鼓を実見したか(乃至は実見した人から聞き知ったのか)は、必ずしも明確ではない。が、いずれにせよ、銅鼓が土中より掘り出されると言う認識は、以後実見を含みつつ、伝承されたこ

とは間違いない。

事実、本稿6に引いた古代銅鼓研究会が、一九八〇年に行った調査では、中国国内の博物館、文物管理機関及び研究機関に所蔵される西南・嶺南系銅鼓は一三八〇点、八六年の調査では一五〇〇点と増加している。つまり、一二〇点は第一次調査後新たに発掘されたことを示すわけであり、この他にも更に数多くの銅鼓が、未発掘のまま地下に眠っていると考えて良いと言(銅鼓研究会編『中国銅鼓研究会第二次學術討論會論文集』、文物出版社、一九八六年)。

(15) 古代銅鼓研究会編『中国古代銅鼓』(本稿注6に既出)、陳剩勇「試論古代越人的『圖騰』」(『浙江師範大學學報』「哲學」社會科學版、一九八七年第一期)。

また、この逸話に限らず、蛙崇拜乃至は信仰を指摘するものとしては、『中国風俗辞典』(本稿注3に既出)、応長裕「麻雀・青蛙・蚯蚓・牛・竜・田公・田婆—奉化」(『浙江省東部の地名・増子』民間稲作信仰調査)、『中国民間文化』九三—二「民間稲作文化研究特集」所収、一九九三年、高文德主編『中国少数民族辞典』(本稿注5に既出)などがある。

(16) 陳剩勇「試論古代越人的『圖騰』」(本稿注15に既出)、何光岳『百越源流史』(江西教育出版社、一九八九)、何星光『中国図騰文化』(中国社会科学出版社、一九九二年)、丘振声「壮族図騰考」(『广西教育出版社』一九九六年)など。

(17) これは、同書では指摘されていないが、『抱朴子』内篇「仙藥」卷十一に、万歳の蟾蜍の頭上には「肉芝」なる角が出来、それ

を干した物を身に帯びれば、矢を射かけられても、射た当人に戻つてしまうという靈力を有するとある。また、『広記』巻四

七九にも、五代・范資『玉堂閒話』に拠るとして、徐（江蘇省）の東はずれにある盤車溝と呼ばれる所に棲む蛙の頭上から葉を得て、それで生計を立てている人があったとする。我が国の「蝦蟇の油」と同断か。

(18) 『牡族図騰考』では、この説に対してだけは「明らかに後世の牽強付会の要素を帯びていることを否定できない」と指摘する（同書一〇〇頁）。

(19) 田鶏の薬効については、清・檀萃『濱海虞衡志』巻五にも、疲労回復に効果があるとの記述がある（叢書集成初編、抛『問影樓輿地叢書』）。

(20) 文彦生『中国鬼話』（上海文芸出版社、一九九一年）所収。

(21) 唐代、嶺南道の境域であった広東省の昌県の北部でも、今日「青蛙獅（子）」またの名を「神獅子」が用いられているとされる（羅其森執筆）、劉志文主編『広東民俗大観』下冊、広東旅遊出版社、一九九三年）。

(22) 但し、四川省の伝説に言う「南海」は、観世音菩薩の居るところとされていることからすれば、後世の小説にもしばしば「南海」として登場するところの普陀山（仏教四大名山の一つ。浙江省）を先ず想起すべきであろう。

(23) 劉世徳主編『中国古代小説百科全書（修訂本）』（李劍国執筆）、中国百科全書出版社、一九九八年）。

※本稿を改めて考えるヒントをいただいた専修大学講師・中野清氏に感謝の意を表したい。